

【第1回まちづくり有識者会議 会議録】

日 時 平成30年7月27日（金）13:30～15:45

場 所 貸会議室マイ・スペース（東京都内）

出席者 岡崎昌之委員（座長）、朝倉はるみ委員、関司直也委員、沼尾波子委員
町長、副町長、事務局（4名）

岡崎座長：小国町は全国でもユニークで先進的なまちづくりを行ってきた町。雪深い山間部の集落の皆さんを、冬は町の中心部へ移転してもらい取り組みにもトライした。これを事業として行ったのは全国的にも小国町ぐらい。総合センターの建設など、昭和30年代後半から全国をリードするまちづくりを行ってきた。そういう流れの中で、今回の計画の位置づけをどうするかが重要。

今回の基本構想の文案に「20世紀型成功体験から決別し戦略的に縮む新たなまちづくりを展開」とある。総合計画は町職員が共有するとともに、住民に対し説得力を持って決意表明をするもの。そう考えたとき、「戦略的に縮む」という展開を総合計画として打ち出すことの意味や、それをどう町民に受け入れてもらうのかについての議論もいただきたい。また、第1章から2章のテーマも適切かなど、自由に意見をいただきたい。

朝倉委員：小国町は広く、集落の数も多い。人口減少や高齢化が止まらない状況の中で、そこに住んでいる人が幸せだと感じられる町であるためには、「山の町のコンパクトシティ」として生活圏域をどのように寄せていくかが重要。20世紀までの「人口減少や高齢化は悪いこと」という価値観ではなく、たとえ3,000人になっても幸せに生きていける町にするため、先を見越した準備としての今後7年間の計画でもよい。

集落移転の例のように、様々トライアルすることが重要。先祖から受け継いだ土地への愛着が強い中、住む場所と働く場所を分けても幸せであるためには、あまりに広範囲に集落が分散して存在するのは困難な時代。そのために小国町をコンパクト化していく戦略のイメージを打ち出したほうがよい。「小さいことは良いことだ」という価値観が伝わるような表現であれば、町民にも理解いただけると思う。

町長：縮む町、コンパクトシティなど表現はあるが、具体的には、冬場だけ町中心部の集合住宅に住んでもらうなど、やり方は様々ある。人口が減っても、医療をしっかりと確保していくことが重要と考えている。

現在、新潟山形南部連絡道路の整備に力を入れている。高規格道路の充実により、外部から集客することで人口減少を補うことができるし、災害時の代替ルート確保の意味もあり、早く実現させたい。

図司委員：計画のあり方として網羅的であるべきという側面がある一方で、町民へのメッセージをどう伝えるかということも大事。「戦略的に縮む」という表現は、かなりチャレンジングなフレーズという印象を受ける。

最近現場で話をしているとき、私が意識しているフレーズは、「暮らし甲斐のある町」。そこに住む意味を問いかけている。小国の場合は二次産業が盛んなので引っ越してきた人と引っ越したことがない人が混住していることが特徴だが、一次産業の方や年配の世代の方など、引っ越したことがない人に、改めてその問いかけを試みることは大事だと思う。小国らしい住まい感、暮らしぶりが見えると移住者は地域に踏み込んでいける。また、引っ越していっても小国を選んで関わってくれる。そういうパターンが、小国町には多様に存在する気がする。昔は兼業といえば農業分野ではマイナスなイメージがあったが、色々な仕事をして地域に関わることは、今の時代にはプラスに見える。そこに関連した個別の政策が見えてくると、住民、移住者ともに人の住まい方を考えるきっかけになるのではないかな。

朝倉委員：「山の中のシリコンバレー」のようなキャッチフレーズはないか。山の中に先端技術があるという部分をキャッチフレーズとして打ち出したら良いのではないかな。

町長：それもブランドになると思う。

沼尾委員：これから、人口は確実に縮小していくし、日本のGDPの世界経済に占めるシェアも90年代の16%から6%へ縮小する中、どこの自治体も生き残りをかけている。人の面では関係人口、繋がりということが言われているが、地域のことを住民に対してどのように伝えていくかという眼差しも必要。小国にいてどのように暮らすかと同時に、これから地域をどのようにグローバルな世界に対し開き、繋いでいくかという視点が大事。製造業を軸に太いパイプで繋がれている事が当たり前前の財産になっている。一方で緑のふるさと協力隊や地域おこし協力隊もいるが、もう少し関係を繋ぐチャンネルを多様化していくことが必要。例えば、製造業自体も技術者のネットワークがあり新しい物が作り出せるプラットフォームがあったり、町に面白い人がいたり、地域資源を活かした体験もできるなど、人や関係を繋ぐチャンネルを多様化すること。ものづくりベースでも最先端であり、食にしても、山との暮らし方にしても知恵が詰まったものが残っている。それを軸にして、どのように外と関係を繋ぐチャンネルを作るか。そのような視点から見ると、とても謙虚な計画の印象を受ける。

地域の暮らしが軸ではあるが「縮む」ためには戦略が大事。骨太に縮むのであれば、外との関係がないと衰退してしまう。製造業と関係の結び結び方がもっと多層であって良い。伝統とハイテクな技術を組み合わせ何を伝えられるか描けたらすごく面白い

プラットフォームができるという印象をもった。そのプラットフォームづくりの戦略がないのが気にかかる。今はそのプラットフォームの役割を医療、介護、教育といった、機能別のハードが担っているが、トータルに暮らしをシェアしたり話し合ったりできる総合的な場がデザインできれば、もっと面白い可能性のある町だと思う。

岡崎座長：この計画案を見たときに、今までになかった面白い計画だと思った。戦略的縮小という視点は、これまでの総合計画にはあまり書かれたことがなかった。前回の総合計画にも関わらせてもらったが、今回は将来人口の部分では縮小を前提にしたが、計画としては全体に縮む計画ではなかった。計画として「縮む」発想は合意形成を取りにくく難しい。しかし小国町は、それを越える可能性がある。それをどのように実現していくか、住民間でもコンパクトな計画について意見が出し合えるような場をどう作るか、計画の基本路線の練り込みが必要と思う。

ドイツ南部バイエルン州のフライブルグ市はEUの環境首都とも呼ばれる。黒い森地方で非常に良い生活環境を持っている。中世の城壁がまだ残っていて、それを上手く利用し、古いがモダンな市街地を形成している。その環境の良さから、全世界から最先端の研究者が多く集まって先端産業を担っている。

町長：今夏、本町に立地する工場の本社があるコロラド州ゴールデン市に出向く予定。小国の工場はアジアの主力工場であり、非常に重要視されている。また、コロラドは山形県と提携しており、柔道の交流でも小国を訪問してくれた。小国高校でもデンバーのイースト高校と交換留学を行っている。こうした様々な観点から、今回コンタクトをとった。

先端技術の集まる場所という話があったが、工場に世界の技術を集約し、研究開発もできるのではないか。そのためにはこの地に住む意味を見出されなければならない。

沼尾委員：東京ではお金があれば何でも手に入り、それに慣れてしまっている。一方で、最近の若者は、暮らしぶりを作ることが面白いと思う人が田舎へ行くようになっている。コンビニのような場を整える方法もあるが、地元の食材を地元民と一緒に作るような、ソフトなインフラの提供の仕方もある。無いものを整備するという方法でない考え方も、一方では必要。

町長：若い人たちが、食べ物やスポーツなどアクティビティ系の起業をしてくれると活気が出ていいと思う。個人所得は県内35市町村の中でも高いが、所得の7割が町外へ出ている。使う場所を町に作らないといけない。若い人が集まれる場所づくりが必要。

岡崎座長：ベースの議論として、集落の集約型なのか、分散型できちんと維持していくの

か、その基本線をどう考えるかは重要なテーマ。先日小国町に伺ったときに、滝集落を案内していただいた。滝集落は一度全戸が引き上げたが、現在季節限定で帰村し農業をしている人たちがいた。そういうのを見ると、人の土地に対する愛着を感じる。

副町長：昭和 40 年代に集落移転した住民が、夏山冬里という仕組みをとった。その名残で戻っている。集落移転をするときに、圃場を再整備した形で集落移転した。

事務局：夏山冬里の初代の年代の子供たちが 60 歳を過ぎ、子どもの時に住んでいた所に帰ってきている。

岡崎座長：基本的に集落があった所には人が住む価値があり、河川整備や林道整備をずっと行ってきた。山間部の集落に人が住むことで、災害を防ぐという役割を持っていた。それを考えると、人口減少をきっかけに集落を無くすことが良いかどうかはわからない。この計画で、住民にどのように基本線を打ち出していくか難しい。

朝倉委員：行政は集落住民に水道などのサービスをしなければならない。

町長：水道や下水も、先を見て計画を縮小しつつある。住宅リフォームなどの助成も行い、世代同居に活かしてもらっている。山間部は高齢者の 1 人暮らしや 2 人暮らしで、若い人が町へ出て暮らす核家族が多いが、親子が同じ町に住める環境なら良いと思う。今後 10 年程度で限界集落は増える。町道は 100 km あり、除雪の面からも集落に住み続けるのは難しいが、高齢者は住み慣れた場所から離れたがらない。言葉で表せば戦略的となるが、具体的には 1 つ 1 つの積み重ねなので、住民の納得いかない部分はたくさん出ると思う。

朝倉委員：買い物ゲームというものがある。町の予算が年間これしかなく、何に使ったら良いか、皆さんで考えましょうというもの。例えば、町の年間予算の 3 割が除雪費であるが、冬場だけ町中へ移り住めばその分を医療や介護に振り分けられるなど、町民へ予算の内容の理解を求め、話し合う場も必要。集落を維持することが目的ではなく、そこに住む人がどうすれば幸せでいられるかが目的なので、限界集落はそれとして、冬場の移住などにより、幸せが得られるというような戦略を入れたら良いのではないか。

岡崎座長：滝集落は、悪くいえば切り捨てた集落だが、実際戻ってくる人がいる。全国で、消滅した集落の多くは、遡れば戦後開拓で拓かれた集落である。小国の場合は、慶長時代の地図にもものっているように、上杉藩の武士が入って開拓した集落も沢山存在する。だからこそ住民の集落への愛着が強いのだと思う。限界集落は端から閉鎖しろという主

張もあるが、果たしてそれでいいのか。

日本は東北から山陰まで豪雪地を抱えているが、地方創生で豪雪をまともに取り上げているところはほとんどない。電気を安く供給して、屋根の上に熱線を張り融雪するなど、ハイテク技術を活かして雪を克服するなどして、集落を維持することはできないか。

図司委員：資源の維持管理コストがこれまでは外部化されていた。生業をやっていることで自動的に田畑や山に人の手が入っていたので、維持管理コストはかからなかった。最近の災害の多発は、そこに手が入らなくなったことの裏返しだと思う。災害はいつ突発的に起こるかかわからないが、ある程度はお金をかけておく必要がある。日常的に田や山に入り、ある程度手を入れていかないといけない。山で何か起きたときに一番被害を受けるのは中心部。森林管理のために地元が常に山と関わりを持ち続けることができる余地を残すことが大事。これまでは行政がやるものとされてきたが、時代が変わってきている。

町長：小国に人が長く住んでこられたのは、大きな自然災害がなかったから。しかしながら災害マップを見ると、ほとんどの集落が沢や川のそばで、土砂災害特別警戒区域に住まいがある。一次避難所が作れない地域もあり、災害に対するまちづくりの観点からも難しい場所ではある。

岡崎座長：そのあたりはもう少し議論が必要。

情報通信技術の進化を総合計画にどう位置づけるか。SNSなどの情報発信ツールは、確かにここ10年ほどで農村を大きく変えたことだと思う。

町長：小国町は、山村地域の中では産業構造が変わっている。安心な食べ物など一次産業を構造的に成り立たせたい。小国は、米づくりはコストが掛かるため、米沢牛の飼育に力を入れている。畜産に関してAI化が進んでおり、農業に関しても取り入れていきたい。食育の観点から多少高くてもいい物を作り食べさせたい。森林環境税も創設されたので、林業にも力を入れたい。

岡崎座長：外とつながる戦略という意味で、クアーズテックなどをベースにしながら、グローバルな展開ができるような書き込みが必要。

5頁の6公共施設の老朽化については、どう書くか悩んでいるのがよくわかる。ここが縮む計画の一番難しいところ。

副町長：ここにピックアップするかの問題。

沼尾委員：多くの自治体では、公共施設等総合管理計画で、公共施設等の経過年数や、維持コストの試算をしている。老朽化対策を掲げるところも多いが、その点書かれていないのはなぜか。

事務局：管理計画の中では廃校施設をいかに管理するかを大きな課題としている。古いから処分するという理屈だけではないため、なかなか書き切れないという側面もあった。一方で町づくりの拠点だった総合センターや、観光という言葉を使い始めた時の先端だった国民宿舎飯豊梅花皮荘は、リニューアルしないといけないことは目に見えているが、書き様がなく、並べてしまった。ご指摘のとおり、元々の管理計画と合わせ、いずれリニューアル、廃棄の必要が出てくるので、もう少し書き直す必要がある。

関司委員：施設そのものを取り上げると大変になる。

全国町村会で交流と観光をキーワードにした研究を行った。我々が再認識したのは、農山村に対する新たな価値発見者の若い世代の人たちと、インバウンドの人たちがどんどん地方に入っていること。観光地だから行くということは無くなっている。新しい農山村への関わり方の拠点づくりとして、施設をゲストハウスにリノベーションし、官から民へスイッチしていくなど、前向きな価値の作りだしとして、新しい動きをどのように結びつけていくかの発想を入れ、追い風を受けてバージョンアップするような書きぶりが仕込まれてもいい。

事務局：町内の方で、ケヤキ材の梁組みに魅了され、昭和初期に建てられた民家を購入した人がいて、磨き上げ、何かに使いたいと言っている。ゲストハウスとして利用するなど、今後の展開が期待される。

町長：空き家は耐震、アスベストなど問題があり、消防法の関係でも費用が掛かる。ほとんどが管理放棄された状態で、使えるのは全体の10%程度。持ち主の居場所がわからないものもあり、90%は使えない。この冬は水道管の破裂が相次いだが、簡単に入ることができなかった。使える物はゲストハウスとしての使用が良い。

朝倉委員：外と繋がるときは、そこに人が居ないといけない。空き家をリフォームして単なるハコとして使用するの難しい感じがする。民泊のようにそこに人が居ることで良く管理され、良い体験をして帰れる。交流人口を考えるのであれば、公共施設を無理にリニューアルせずに、りふれが大丈夫なのであればそこを拠点としてはどうか。民泊でも、家主が小国の暮らしを語るような、人同士の交流が生まれなければ、繋がりを持続できない。老朽化した公共施設は、廃屋ブームもあるので朽ちるに任せるという考え方もある。観光客向けには今ある施設を使い、梅花皮荘はリニューアルが無理であればレ

トロな宿として利用しても良いのでは。現在の状況から優先順位を決めて改修していくしかない。

町長：大学生を地域で受け入れる事業をしているが、新潟大学はわらび園の管理の手伝いを通じて地域に入り、住民と楽しく交流している。それを見ると、ゲストハウスにおいても地元の人との交流は重要と感じる。

事務局：6月に赴任した協力隊は、樽口という集落のリーダーと親しくなり、その人が居たから樽口へ入り、その人に教えてもらって農業を学びたいという考えがあった。住まいは、現在東京に住んでいる方が実家をリフォームして、そこに住まわせて頂きながら農業を学んでいる。樽口には、そこで活躍しているリーダーがいるので、先端の集落であっても活気がある。「人」が明らかに出てくる集落だ。

岡崎座長：それは、先ほど図司委員が言った、「小国の暮らしぶりが見える」ということだ。

町長：樽口は集落の団結力が強い。小国のマチュピチュのようなところだ。

朝倉委員：そのようなイメージを上手に出したらどうか。消費者がイメージしやすい。

町長：そこには水を引くのに大変苦労した地区で、協力して環境を整えた物語もある。

図司委員：新しい動きを応援するようなソフト事業はあるのか。

事務局：空き家の改修に関しては、行政が主体となって仕掛けて、現在1軒行う予定。

図司委員：人材育成に関しては、縮むだけではなく前向きに展開し、チャレンジを応援するといった、踏み込んだ記載があっても良いのでは。予算的にはさほど掛からないので、場づくりと、後押しがあればいいのではないか。スタイルは様々あるので、地域振興型で多くの人に関わり、行政も広報などで後押しすれば動きが見え町のトーンが上がる。そういう仕掛けがほしい。

町長：仕掛ける主体となる人が出て来ると活性化し広がりが出てくるが、そこが弱い。町では地域商社を立ち上げようとCSOの募集をしたところ396人の応募があった。成功すれば、やりたいことに対して、期限を付けて後押しするなど手段もあるかと思う。

沼尾委員：地元と外部の関係を結ぶ「連携・協働」には、地元の人を持っている土地の地

勢などの、文章になっていない知恵をきちんと継承していくという姿勢が大切。マタギ文化や食を育み、継承してきた方々が高齢化しているが、それを受け渡しつつ新しい物と融合する事が大事。その視点がもう少し入ると良いのではないかという印象を持った。

岡崎座長：オーラルヒストリーや、所作で伝わってきた生活技術のスキルは沢山ある。例えばかんじき作りのようなもの。それらはあと5年、10年で姿を消す。そういうものをDVD等できちんと残すことは重要。精神の部分を次世代につなぎたいというのは読み取れるが、具体的な部分についても触れることが重要だと思う。

事務局：今年から広報で「技を緬う」というコーナーを作り、途絶えそうな技術を伝承している方々に見聞きし、伝統技術を記録しておく特集を組んだ。広報としても次の世代に残そうとしている。大変参考になった。

岡崎座長：黒沢峠の手前にカヤの大木があった。カヤは葉を磨り潰すと蚊取り線香のような匂いがする。昔はそれで蚊を遠ざけたと聞いた。そういう知見もだんだん失われる。

町長：山菜の宝庫である土地柄、小国の人々はみな山菜が好きなので、山へ入る足が途絶えない。滝に来る人たちも、そういう面があるのかもしれない。かつては、年間の生活費の半分程度を山菜で稼いだりした。

朝倉委員：子供たちに、山の暮らしがどれほど豊かで幸せなことなのか、子供のうちに刷り込みすることが大切。国際化や外へ出る人の育成も大事だし、小国と海外が直に繋がる時代にもなっているが、しかし小国で生きていきたい人を減らさないことが重要。

町長：小国へ戻りたい感覚を育てること。

朝倉委員：あらゆる手段で、小国は良い所だという教育を子どもたちにしっかりしていく。この5年から10年の間に失われそうなことを子どもたちに教えていくことは大切。途中外へ出ても、小国へ帰れる、ここで暮らしていけるのだという生活基盤を整えることが重要。

町長：仕事のミスマッチがある。難しいのは、小国には、一生懸命教育をして都会の大学に行っても、戻ってきてから、せっかく勉強してきたことを活かせる仕事がない。研究施設などがあれば、受け入れの幅がでるか考える。

岡崎座長：子供への伝承の部分について、小国にいる価値が伝わるよう書き込むべき。

朝倉委員：東京の大学に行ったが、地元である湯布院が好きで医師であるご主人を巻き込みUターンした女性旅館経営者を知っている。

副町長：それは、そこまで湯布院の魅力を作ってくれた先人がいるから。

朝倉委員：長いスパンでのまちづくり構想が重要。小国も「白い森の国」という、生活地としても、観光地としても、長期間、魅力的な場所であることに期待したい。

町長：「白い森の国」と言えば「小国」のイメージに繋がるようにしたい。

朝倉委員：湯布院は別府と差別化するために、100年後にいい町になるように考えた。小国は温泉資源もあるので森と融合させるなどして、町民を幸せにすることができるそれらの資源の価値を認識してもらおうべき。

町長：小国はいいところが沢山ある。

沼尾委員：遠野では、馬の産地として、馬を贈呈して医師をよんできた例がある。

岡崎座長：遠野市は日本で唯一の乗用馬の産地。

町長：釣りも盛んで、ワカサギ釣りも定着してきた。

岡崎座長：体制づくりのところで、行政のスリム化の必要はどうか。スリム化することが良いことなのか。職員が少なくなり、災害情報が伝わらなかった例もある。自治体自らが行政のスリム化を謳う必要は無いのではないか。行財政改革の潮目は変わってきており、住民からもそれに関しての意見は少ないはずである。住民からすれば、担当とは関係なく、困りごとを何でも聞いてくれる職員が必要。重要なセーフティネットである。

町長：職員にはもっと踏み込んで仕事をするよう話している。民間から行政に入るとスピード感の違いを感じる。仕事の仕方として、町民側のスタンスに一步踏み込んで行うことが少ない。民間は、相手側に評価してもらわないとビジネスにならないのでその部分の理解を考えるが、行政は相手の求めが何か考える踏み込みが足りない。

岡崎座長：地域と住民の視点に立つことは基本。

沼尾委員：扶助費はどこが増えてきているのか。

副町長：老人介護の部分。

事務局：病院、介護老人保健施設、訪問看護の運営に関しての一般財源操出負担金が多い。

沼尾委員：スリム化は義務的経費の削減の議論であり、扶助費が上がっているなのでその分人件費を削ってやりくりすることと、交付税規模が今後どうなるか。法人住民税の地方法人税化により税収の一部が持っていかれてしまうので、製造業が強い自治体は損をしてしまう。歳入が厳しい中で扶助費が増え施設整備にかかる債務の償還も入ると、どうしても人件費の削減になってしまう。人件費のスリム化よりも健康長寿という視点で、扶助費の増大も含めて高齢者福祉の分野がもたらす公費の負担増の認識をどう共有してもらうか。癒やしの園のようなしっかりした施設があり、サービスを受けられれば、皆そこに行く。そのことがもたらす公費の負担増をどう認識してもらうか。そういった点を踏まえ、地域包括ケアシステムの議論をした方が良いのではないか。マンパワーは今後益々必要になる。

事務局：(今後の日程説明) 10月9日午後5時・都内開催